

【研究余録2】説話文学にみる片袖幽霊譚の変遷について —近世の説話を中心として—

奥澤真一郎

はじめに

古来、立山はその山容や、地獄谷などに代表される山中の特異な自然景観、自然現象から多くの宗教者や文人たちの関心を集め、様々な文学作品に取り上げられていった⁽¹⁾。やがてそれらの文学作品は日本人の思想形成に大きな影響を与えるとともに、後に成立する文学作品の根底にも色濃く反映されていくようになった。

平安時代ごろから立山でも山岳信仰が盛んになり、立山は「地獄の山」としての認識が広まっていく。そこから成立した説話が、いわゆる「立山地獄説話」で、そのあらすじは以下のとおりである。「立山地獄」に堕ちた亡者が諸国一見の旅の僧侶に立山山中で出会い、僧侶に対して自分の遺族への言伝を依頼する。その言伝は、亡者が立山地獄に堕ちて厳しい責め苦を日々受けていること、そして、自分への供養を営んで欲しいということの2点であった。立山を下山した僧侶は亡者の遺族に会って言伝を伝える。それを聞いた遺族は亡者の追善供養を執り行うことで、亡者が忉利天往生を遂げる…。このような説話は11世紀成立の『大日本国法華経験記』⁽²⁾(以下、『法華験記』と表記)に始まり、その後は『今昔物語集』⁽³⁾や、『地藏菩薩霊験記』『三国伝記』『宝物集』などに受け継がれていった。これらの伝承は、人々に現世と来世との強い結びつきを感じさせるとともに、「地獄」は、人々の脳裏に強く印象づけられた。その象徴として「立山」が知られるようになっていったのである。

室町時代になると能楽の隆盛にともない、謡曲『善知鳥』が登場する。これは従来の「立山地獄説話」すなわち立山を舞台とする仏教的往生譚に「片袖幽霊譚」が加味され、よりストーリー性や社会への強いメッセージ性を帯びて、文学的にも洗練された作品となった⁽⁴⁾。

さらに江戸時代になると、幕藩体制の確立とその後の社会の安定によって、仏教界にも新たな動きが生じた。それは、仏教が幕府の支配体制に組み込まれたことにともない、仏教そのものがより民衆に近い存在となったことで、その教義が民衆にも理解しやすく平易になったことや、各寺院で信者を獲得するために唱導が盛んに行われたことにより、仏教の世俗化が顕著にみられるようになったことを指す。これによって仏教が一般民衆にもひろく普及し、仏教的倫理観に基づく新たな社会慣行の定着も見られるようになった。加えて、江戸時代は寺子屋の拡大による識字率の飛躍的な向上がみられ、それによって高まった庶民の知的欲求を満たすべく商業的な出版業界が発達するなど、社会全体が成熟した時代を迎えた⁽⁵⁾。立山も当時の仏教観・倫理観を背景とする新しい説話の題材のひとつとして様々な「カタチ」にアレンジされながら採用されていった。ことに『片袖幽霊譚』を加味した立山地獄説話は、江戸時代にそのストーリーを様々な「カタチ」に変容させ、さらに社会に広まり人々に親しまれるようになっていった。

これら、「片袖幽霊譚」の変容とその内容分析についての先行研究は、以前から多くの研究者によって行われている。近年でも太刀川進氏⁽⁶⁾堤邦彦氏⁽⁷⁾三村昌義氏⁽⁸⁾などの研究者が、丹念な資料分析に基づく研究成果を発表しており、筆者も大いに参考にさせていただいたところである。富山県内においても米原寛氏、加藤基樹氏らの研究がある。これらの先行研究を踏まえて、この「片袖幽霊譚」を題材とする説話を、文学・文学史的な側面から検討していきたいと考える。前述したようにこの「片袖幽霊譚」は、数多の立山にまつわる文学作品の中でも特に日本人に強い印象を与え、江戸時代に入ってから様々な時代的要素が加わってさらに洗練され、多くのジャンルに細分化されていった点に特徴がある。これらを検証していくことによ

て、特に都市部の人々によって確立し、全国に波及していった文化の大衆化の中で、説話の中の立山がどのように人々に受容され、どのように変容していったかを明らかにしていきたいと考える。

1. 「片袖幽霊譚」の変遷とその内容

1-a 従来の「片袖幽霊譚」の分類

「片袖幽霊譚」の分類を始める前に、先行研究をひもといてみたい。まずは堤邦彦氏がその著書『江戸の怪異譚—地下水脈の系譜』（ぺりかん社、2004年）において、緻密な資料分析を行い「片袖幽霊譚」を明確に分類しているので紹介したい。堤氏はまず「片袖幽霊譚」を『A 古代・中世文芸（『法華験記』、『今昔物語集』、『善知鳥』、『奇異雑談集』）』・『B 中世僧房日記、縁起書（『清涼寺縁起』など）』・『C 物語草子、神楽祭文』、『D 勸化本、高僧伝（『善悪因果集』など）』、『E 近世の寺院縁起（『大念佛寺縁起』）』、『F 近世怪異小説（『奇異雑談集』、『因果物語』、『宿直草』、『諸国因果物語』など）』、『G 浮世草子、演劇、読本、草双紙（『融通大念佛』、『大念佛寺靈宝略伝連理隻袖』）など』、『H 詐欺譚、ニセ幽霊（『本朝秘陰比事』など）』、『I 弁惑もの、謎解き（『古今弁惑実物語』など）』に分類している。このうちまずA Bを、立山地獄をテーマとする古態の「片袖幽霊譚」とする。『清涼寺縁起』は、立山と善光寺を関連付ける亡霊成仏譚のなかに、証拠の片袖のエピソードを語るといふ説話の基本形が見られ、『法華験記』と『今昔物語集』は女人罪業思想の影響が強く⁽⁹⁾、また『善知鳥』は「殺生」といふ仏教の教義上、許されざる罪に対する応報が描かれる。これらはいずれも立山信仰を基盤とし、立山の山中他界信仰をベースとして亡者との邂逅を語るところに古代、中世の「片袖幽霊譚」の特徴があるとする。以下、堤氏の分類で特徴的なものを紹介する。例えば、Eの近世寺院縁起においては、立山の山岳霊場はもはや物語の舞台としてあまり重要視されなくなり、個々の寺院の縁起や高僧の史伝に関連付けている点に特徴があるとする。Fは女人罪障、殺生など古態の「片袖幽霊譚」ではなく、金銭の未練、商徳徳といった徳川時代の町人層の生活実態に根差す教化咄へと変容がみられ、Gは「文芸としての趣向性を重んずる作為がこめられ、当代の文芸趣向を駆使した宗教説話の読み直しとして新たな説話が作られていったとしている。

堤氏の分類は、時代別ジャンル別にそれぞれの歴史的文化的背景を的確にふまえ、非常に参考になるものである。そこで次項では、「片袖幽霊譚」を文学的な見地から特にそのストーリー性に着目したうえで、さらなる分類を行っていきたい。

1-b 本稿における「片袖幽霊譚」の定義について

さて、ここでは「片袖幽霊譚」のストーリー上の定義を明確にするため、下記a～dの物語を構成する4つの要素を有するものを「片袖幽霊譚」と呼ぶこととしたい。

- a 亡者が僧侶等の仲介者に対して伝言を依頼し、自分の望みを伝える。
- b 亡者が証拠（形見、または伝言の象徴）の品として、片袖などを自らの意思で手渡す、あるいは置いていく。
- c 僧侶などの仲介者が亡者の遺族に言伝をする。
- d 亡者の遺族が言伝をうけて行動を起こし、物語が展開する。

以上であるが、ここでは特にbの要素について、これが含まれていない作品は、類話は多くあるにせよ「片袖幽霊譚」には含めなかった。その理由として、証拠もしくは形見の品を手渡す、または置いていくという一連の行動は、亡者が自発的に行っているものであり、それはとりもなおさず亡者が現世に遺した非常に強い情念の表れである。その情念の象徴として、形あるものを遺していくという意味合いが込められているからである。この場面があるからこそ、物語がより深い内容、かつ深く引き締まったものとなり、読者にも亡者の思いが強く印象に残り、物語の世界に引き込まれていくのである。その意味でこの部分は物語前半

部分のクライマックスとなっているのである。そのような中から本稿では、謡曲『善知鳥』を「片袖幽霊譚」の嚆矢とし、それ以降に作られた『善知鳥』をモチーフとする説話も含めた19作品を、リストアップした。もちろんこの他にも「片袖幽霊譚」にまつわる作品は数多くあるのは承知しているが、それらの分類、分析については今後の研究課題としていきたい。

1-c 本稿における「片袖幽霊譚」の分類方法

池田弥三郎氏は日本の仏教説話の特徴として、亡者は遺族の前に直接あらわれ、伝達する能力を十分に有していながら、物語の冒頭では必ず第三者（亡者と遺族の仲介者）に対して言伝を依頼すると指摘している⁽¹⁰⁾。このような文学的演出も臨場感を強調しており、修験者や僧などの第三者の特殊な宗教的能力や仏教そのものの功德を読者に強く印象付ける。加えてこの説話の特徴が場面転換を明確にしてストーリー性を高めるといった文学的効果を意識して構成されていることを考慮すると、「片袖幽霊譚」においてbの要素は必要不可欠といえるであろう。そのような観点からすると、『法華験記』や『今昔物語集』にある往生譚は、一連の「立山地獄説話」の根本となる元祖的な物語ではあるが、bの要素がないので本稿の分類には取り上げないことにした。同様に③『因果物語』中巻五所収「二柙ヲ用者雷ニツカマル事付地獄ニ落ル事」（鈴木正三編、義雲・雲歩著）では、ある聖が立山で惣右衛門の女房が地獄に落ちていく様子を見て、思わず帯をつかみ引き留めるが帯が切れてしまい、あえなくその女房は地獄へ落ちてしまう。しかし聖が惣右衛門宅へ行くと、女房が何事もなく家にいたので不思議に思って問いただす。その結果、女房は自分の罪業に気づき、信心を深めるという内容である。これは広義には「片袖幽霊譚」に含まれる場合が多いのではあるが、女房が自発的に帯を置いていったのではなく、あくまで切れた帯の残りが惣右衛門の手に遺ったということであるから、こちらもbの条件に当てはまらないのでとりあげない。また⑩『耳囊』所収「亡霊の歌の事」（根岸鎮衛著、江戸後期）のように江戸詰の武士の妻が夫の留守中に、姑の醜態を見たがために殺害されたことで夫の夢枕に立ち、姑の悪事が露見していくという内容の説話では、亡者と遺族の仲介者がいないうえに、妻の霊が夫に自分の望みを直接伝えているので、aとcの要素を欠いているといえよう。しかし妻の霊が夫の枕元に直接、形見の髪束や短歌一首をおいているので、bの要素は満たしていると考えられるべきであろう。さらに夫の方も妻の言葉を聞いて様々な行動を起こし、事実が判明したということから、dの要素は満たしていると考えられるだろう。

また、表中の⑯『鏡ヶ池操松影』所収、「江島屋騒動」（三遊亭圓朝著、明治2年（1868））は、明治期に一世を風靡した創作落語であるが、これもお里が入水自殺する際に、婚礼衣装の着物の片袖を引きちぎって木の枝にかけたということで、「片袖幽霊譚」の影響がみられる作品である。しかし、上記の4つの要素でいうならば、aとcの要素がみられず、亡者となったお里が具体的に何を遺族に訴えたかったのか明確に触れていない。またbの要素に関しても、婚礼衣装の片袖を木にかけて入水した、つまり、かろうじて自分の意思で形見を遺して亡くなったということだけが当てはまる。しかし、この作品を文学的に解釈するならば、婚礼衣装の片袖に亡くなったお里の強い情念が込められており、しかもこれが何を意味しているのかについて理解することは、今も昔も読者にとっては左程困難なことではなかろう。またその後のストーリーの展開も、お里ら母娘の望んだであろう通りに進んでいく。よってこれらを勘案すると、本稿では、⑯『鏡ヶ池操松影』は「片袖幽霊譚」に含めるのが妥当であろう。そして、⑲『三ツの山巡』（国立国会図書館蔵、文政3年（1823））も紀行文学のジャンルに含まれる作品であることから、本来は「片袖幽霊譚」に含むべきではないが、説話文学の読み手でもある芦峯寺の宿坊家が、どのような意図をもってこの話を受け入れていたかが理解できる作品でもあるので、例外的ではあるが、今回は表中に入れておくことをお断りしておく。かくも類話が多く、カテゴライズするのが困難であるところに、この手の説話が人々に愛され、語り継がれたことを見い出せるであろう。

2. 「片袖幽霊譚」の時代による変化の位相

2-a 「片袖幽霊譚」における内容分析とその変容について①

さて、今回作成した表を利用して、その中にある関連19作品の分析を各項目別に行っていきたい。表-1に基づいて各項目別に表-2から表-9まで作成したので、これを元に各作品を分類・検討していきたい。まずは「表-2 成立時期」である。これをみると17世紀に成立した作品数が7で圧倒的に多く、次いで19世紀の6作品となっている。若尾政希氏によると、日本で商業出版が成立したのが17世紀初めの京・大坂であったという。そして17世紀後半には江戸に、18世紀半ば以降には名古屋・仙台といった地方の城下町にも波及し、19世紀には列島の各地に小売りを専門とする業者が生まれ、明治を迎えたという⁽¹¹⁾。このように日本は早い時期から「商業出版の時代」に入ったわけだが、世紀ごとにみた「片袖幽霊譚」をモチーフとする説話文学の出版件数の増加は、この出版業界の全国的な広がりとも一致する。このような出版件数の増加によって、当然ながらその題材となる多くのトピックが必要となってくるわけだが、「片袖幽霊譚」もその需要に応えるべく様々なアレンジが加えられながら、トピックの一つとして再生産されていくことになる。

次に「表-3 舞台となった場所」についてみる。①の謡曲『善知鳥』の舞台は、越中立山と陸奥外ヶ浜である。平安時代にはすでに越中立山は地獄が存在することや、山岳修験の恰好の霊場として有名であったことは、多くの文献資料からも証明されている⁽¹²⁾。さらに加藤基樹氏は、平安末期の貴族たちの立山観として、立山が都から見て鬼門の方角であること、さらにその方角に立山地獄があること、鬼門封じとして比叡山延暦寺があること⁽¹³⁾、を指摘している。また陸奥外ヶ浜もそれまで続いていた陸地が尽きる場所、国土の終端という意味の「卒土の浜」が地名の由来であるという⁽¹⁴⁾。立山、陸奥外ヶ浜いずれも仏教的には重要な土地であり、仏教説話を構成するにあたっては恰好の舞台となりえた。越中立山、陸奥外ヶ浜、これらの土地柄が読者に与えるイメージは、独特の寂寥感であり、生者がうかつに立ち入ることのできない「異界」であった。そのような場所での亡者となった獵師と諸国一見の僧との出会いは、非常に緊張感を伴うものであり、立山と外ヶ浜がもつ「場のチカラ」はそのような感覚をいやがうえにも読者に与え、作品全体の「聖性」をも担保する効果を持っていたといえる。

ついで表-3が示すように、「片袖幽霊譚」において関連性のある作品群のうち、亡者と僧侶等の亡者と遺族の「仲介者」たる人物が会う場所（亡者が言伝を行う場所）に「越中立山」が選定されている作品は6作品、これに「越中」「越中しら山」なども加えると、9作品が越中を舞台に選んでいる。次いで多いのは「箱根（山）」の5作品である。次に、もう一つの舞台として遺族の住む場所についてみてみたい。「片袖幽霊譚」では、亡者が片袖を渡す場面（別のものを渡す場合もある）が、ストーリー上の重要なアクセントとなっていることは言うまでもない。こちらの方は陸奥外ヶ浜が2作品、その他、京都、大坂、福原、伊勢松坂、金沢と実に様々である。これは『「片袖幽霊譚」を加味した立山地獄説話』が、時代を経て仏教色が薄れていき、それとともに怪異的現象や奇談を題材とする「世俗説話」へと内容が変化していったことと時期を同じくする。「越中立山」や「陸奥外ヶ浜」が「片袖幽霊譚」の舞台として採用されなくなったのは、それらの場所が持つ聖性、いわゆる「場のチカラ」を必要としない、従来の仏教的な権威にとらわれない新しい作品が作られるようになっていったということであろう。

さらに「表-4 亡者」についてみてみたい。『「片袖幽霊譚」を加味した立山地獄説話』の元となった『法華験記』や『今昔物語集』巻十四「修行僧至越中立山会小女語第七」（以下、『今昔物語集』巻十四の七とする）に登場する亡者は、近江の若い女性であった。『善知鳥』で亡者が獵師となり男性の墮地獄が描かれる。この『善知鳥』以降に作られた作品群も含めて、亡者を性別で分類すると、男性の亡者は男性が7名、女性が11名と女性がやや多くなっている。次に「表-5 亡者の墮地獄の有無とその理由」についてであるが、その前に先ほどの『法華験記』と『今昔物語集』巻十四の七について触れておきたい。これらの説話におい

て、亡者となった若い女性の墮地獄の理由は以下の通りであった。

「…我是近江國蒲生郡人 我父母今在其郡 我父佛師 但用佛物 我在生時 以造佛物充衣食 故死 墮此地獄 受難忍苦 …」（『大日本国法華經驗記』第二百二十四）

「…我れは此、近江の国、蒲生の郡に有し人也。我が父母于今其の郡に有り。我が父は木仏師なり。只、仏の直を以て世を渡りき。我れ生きたりし時、仏の直を以て衣食とせし故に、死て此の小地獄に墮て、難堪き苦を受く…」（『今昔物語集』卷十四の七）⁽¹⁵⁾

両話とも父が仏師で仏像を売った代価で生活していたということで、これが墮地獄の理由となったという。現代の感覚では、墮地獄の理由が明確ではないとも思われるが、これらの説話の亡者はいずれも女性であり、それゆえに女人罪障による墮地獄は必然とされる認識もあったのだろう。

さて、表-5においては、「墮地獄の理由が明確である作品」「墮地獄の理由が「生前の罪」である作品」「墮地獄はしたが、その理由が不明である作品」「墮地獄したかすら不明である作品」の4つのカテゴリーに分類した。その中で①『善知鳥』は、獵師の亡者が焦熱地獄や鳥地獄の責めを受けるなど、墮地獄の様子が克明に描かれている。当然、墮地獄の理由も「殺生」という明確な仏教上の罪業に基づくことはいままでもない。もっとも、『善知鳥』のテーマは「殺生の罪を犯さざるを得ない下層身分の人々の救済」という点であり、地獄の責め苦の様子を克明に描けば描くほど、そのテーマが読者の心に強く突き刺さっていくところに文学的な効果がある。同様に⑬『善知安方忠義伝』も、善知安方が主家滅亡後、陸奥外ヶ浜で獵師を生業とし、殺生を繰り返した。この結果、善知安方は死後に畜生道に墮ちたが、焦熱地獄や鳥地獄など、地獄の責め苦を受けている設定になっている。また②『清涼寺縁起』では、小淵郷の名主の道善なる人物が施を過分に受けたこと、釈迦堂の近くに住みながら釈尊に帰依しなかったことなどが理由で、これも地獄ではなく畜生道に墮ちている。一方、これらのような仏教上の理由以外の作品もある。⑤『新御伽婢子』巻五の三「沈香合」においては、松やの某の娘は甲斐の甲斐あって、すんでのところ墮地獄を免れたが、その娘が地獄に墮ちそうになった理由は心中（邪淫の悪執）である。言うまでもなく心中は、江戸時代に入ってから社会現象といえるほど流行した。それと同時に幕府はこれを問題視して禁令を出した。心中が社会悪とされた理由としては、次の2点が考えられる。まず江戸時代、幕府が儒教思想にもとづき安定した統治を行っていたが、そのような治世の下であえて自ら死を選ぶことは幕府に不満を持つ不穏分子であり、排除すべき対象であると考えられたこと⁽¹⁶⁾。2つ目は、当時の社会はまさしく「イエ」社会であり、人々は「イエ」という組織の中で自己の立場をわきまえて生きることを強制された。「イエ」の存続、家業の発展は何よりも重要なこととされたので、当時の結婚も個人と個人のものではなく「イエ」と「イエ」との結びつきと考えられた。当然そこには自由な恋愛が介在する余地はない。そこで遊郭は、常にお金が絡んでくるという意味で不完全なものではあったにせよ自由恋愛が可能で、純粋でストレートな感情を発露でき、義理人情など世間の様々なしがらみからほんの一時だけでも解放される唯一の場所という認識があった⁽¹⁷⁾。しかし所詮は、この世で成就しない関係であるがゆえに、来世で「二世の契り」を結ぼうという考えは、日本人の死生観をより洗練されたものに昇華させ、当時の人々の共感を得ることもできたのであった。一方、社会通念上において「心中」は、「イエ」制度の存続を揺るがす重大な罪悪とも認識され、社会一般でも家内でも許されざることとされた。つまりこの⑤の説話に登場する堺の松や何某の娘は、表面上は仏教の教義上の罪業である「邪淫」の報いとなつてはいるが、実際は仏教における罪業と同等かそれ以上の罪とされた「心中」という「社会通念上の罪業」を理由として、地獄に墮ちそうになったといえる。「心中」というものは、物語や歌舞伎のテーマとしてならば世間のウケが良いが、いざ身内のこととなるとやはり話が別ということになり、世間体もあり断罪の対象とされる。商家出身の井原西鶴が手厳しく「心中」を批判するのも当然のことなのであった⁽¹⁸⁾。

これらのことから江戸時代の人々の関心は、前時代の人々が強く抱いた「あの世」に対してではなく、義理人情やイエ、カネ、身分など様々なしがらみのある「この世」の中でどう生きるかということに向けられていたと考えられる。一方でこの世に生きるために必要な社会規範や処世術の根底にあったものは、庶民生

活に密接に定着していた仏教の教えであり、それを基礎として発展し広まっていった様々な社会通念や倫理的・道徳的な拘束力であった。⑤の説話にはそのような社会的な背景が強く反映されている作品といえよう。

また⑤の説話のもう一つの見方として、平野大念佛寺の功德を強調するという一面もあるといえよう。従来の説話の流れでは墮地獄の責めによる苦しみを訴え、供養を希望する言伝を依頼し、それを聞いた遺族が供養した結果、忉利点に往生するなど、墮地獄から脱することができたというものが一般的であった。⑤の説話は心中した松屋某の娘はまだ墮地獄しておらず、箱根地獄をさまよっているところを、上方へ行く途中の巡礼二人に出会い、回向を希望する言伝をする。このパターンも従来の「片袖幽霊譚」から派生したものであるが、亡者が地獄へ墮ちる直前に回向をすれば、苦しみを受けることなく往生できるという点を強調した説話という意味で、注目すべきであろう。

さらに④『宿直草』の「建仁寺の餅屋告をうる事」は建仁寺門前の餅屋の娘が鬼たちから責めを受けるのだが、この場合、餅屋の娘は生きながらにして地獄の責めを受けている。その理由は、父母が^{かつしき}喝食から餅代としての油を過分に取っていたからだという。代価を過分に取ったことは、商業倫理上の問題とされ、古くは『日本霊異記』⁽¹⁹⁾『因果物語』⁽²⁰⁾『驢鞍橋』⁽²¹⁾などにも不当な利益の取得を戒めた説話がみられ、仏教上の罪業の典型といえる。ただ、④の説話が他の説話と大きく異なるのは、これら地獄の責めが餅を売って利益を得ている父母に対してではなく、特に罪業のない生きている娘に課せられているという点にある。このあたり、④『宿直草』のストーリーは独特であり、父母が最も大切にしているであろう娘に対しての報いとして地獄の責めが課せられることにより、より読者に対して娘が受けている責苦の印象を強め、父母の罪業の深さを認識させる作意があると考えられる。

また、『宿直草』のストーリー上のもう一つの観点として、前述の「イエ」制度とのかかわりがあるのではなかろうか。すなわち、「イエ」組織の中で、家業の発展は何よりも最重要視されるものではあるが、一方で行き過ぎた商行為や利潤追求は罪業として戒めの対象となる。『日本霊異記』においても、「因果応報」が強く訴えられ、不当な商行為は仏罰の対象であった。組織の罪業の報いは組織の^{イエ}構成員へ…。その構成員の中でも娘は見目麗しく、父母も目の中に入れても痛くない。何よりも娘は「イエ」組織を存続させていくための後継者として、大切な存在である。そのような人物に対して、「イエ」組織の因果が報いとなって表れてくる。このような点に江戸時代の人々は何よりも恐れたであろうし、それゆえに当時の人々の社会的感覚が明確に表れているのではなかろうか。多くの「片袖幽霊譚」のうち墮地獄の理由が明白なのは、以上の5作品である。そのほかの作品については、墮地獄の理由を「生前の罪障」(女人罪障)として具体的な罪が何なのか明確でなかったり、そもそも墮地獄したかさえ記述がなかったりと非常に曖昧になってくる。詳細は表-5を参照願いたい、そのあたりを他の事項と関連付けながら述べてみたい。

「表-6 亡者の遺族」であるが、ここでは亡者の遺族の身分に注目した。すると商人が8作品、ついで武士が5作品(足軽含む)となっており、作品群の大半を占めている。表-5にも関連することであるが、江戸時代に入ると「片袖幽霊譚」をモチーフとする説話は仏教説話の枠を超えてしまい、もはや地獄に墮ちたかや地獄に墮ちた理由などは物語の展開上、さほど重要な事ではなくなっている。例えば⑦『奇異雑談集』は「片袖幽霊譚」にまつわる怪異現象そのものに主眼が置かれ、亡者となった足軽の伝言も「供養して欲しい」などではなく「…われわれに御あい候よしをわたくしの宿におほせ候へ…」という消極的な願いにとどまっている。(筆者註、表-7「亡者の伝言」を参照の事)⑧『本朝桜陰比事』、⑨『諸国新百物語』は「片袖幽霊譚」を利用した悪事が露見する「辨惑物」として、そして⑩『諸国因果物語』は浄土宗の功德を説くことにと、それぞれ物語の主眼を置くポイントが異なってきたり、娯楽性を帯びた別の要素が作品に加味されるようになった。

2-b 「片袖幽霊譚」における内容分析とその変容について②

続けて「表-8 亡者と遺族の仲介者」について触れておきたい。前述したとおり、池田弥三郎氏は日本

の説話文学にみられる特徴として、第三者を亡者と遺族の仲介者として登場させるケースが非常に多いことを指摘した。「片袖幽霊譚」をモチーフとする説話文学も同様のストーリー展開が見られ、便宜上池田氏のいう第三者を本稿では「亡者と遺族の仲介者」としたわけだが、この仲介者の職業や身分にも変容が見られる。①②は越中立山に修行ないし参詣にやってきた僧侶、④は関東で不思議な体験をしたとして京都にやってきた僧侶である。仲介者が僧侶であるという説話は『日本霊異記』にさかのぼる。上巻「子の物を偷み用ゐ、牛となりて役はれて異しき表を示す縁第十」の説話をとりあげる。大和の国添の上の郡の山村に土椋の家長の公という人物がいた。ある日、方広経を誦んで前世の罪を懺悔しようとする一人の僧侶を請け得た。その夜、僧侶は家の牛から、自分の前世は家長の父である事、その父が生前、ある人に与えようと思ひ子に告げずして稲を十束取ったため、現世で牛に生まれ変わり償っているということを知った。家の物を勝手に持ち出したということが仏教上の罪業になるということも理解しがたいが、土椋の家長の公が父を赦すと告げたところ、牛は涙を流して大きく息をつき、その日の申の刻に亡くなったという。同様の説話は中巻「法華経を写したてまつりて供養することによりて、母の女牛となりし因を顕す縁第十五」にもみられる。高橋の連東人が亡き母のために写経し迷いから救ってもらおうと僧を招く。僧侶はやはり子の物を偷んで牛と化した母親から、前世で子の物を偷んだために牛となって生まれ変わったことを夢で告げられる、というかたちで仲介者的な役割を果たしている。またこの場合の僧侶は、特に面識のない、いわば「行きずりの僧侶」が求められることも特徴的である⁽²²⁾。

『今昔物語集』巻十四の七においても、娘の亡者とその父母との仲介者は立山で修行中の僧侶であり、同じく『今昔物語集』巻十七「墮越中立山地獄女蒙地藏助語第二十七」では、立山に修行に来ていた僧、延好が仲介者となっている。また同書の巻十四「越中国書生妻死墮立山地獄語第八」は直接仲介者としての役割は果たしていないが、「…貴き聖人の僧を具したり」と、僧侶を連れ立って立山に行っている。これは、立山が当時の人々にとって特異な「異界」という認識であったこと、また立山では奇怪な現象が起きる恐るべきところであるため、生者がそのような「異界」に接する場合は、災いを避けるために聖職者を伴っていかねばならなかったこと⁽²³⁾をあらわしている。その後の中語の制度にもつながる考え方だと思われるが、立山に行くにはかくも周到な準備が必要だったのである。

「片袖幽霊譚」においても、たとえば①『善知鳥』では「諸国一見の僧」、②『清涼寺縁起』でも「越中立山に参詣の僧」と、『日本霊異記』と同様に各地の霊場を旅して修行する僧が仲介者となっている。しかし時代が下ると仲介者は必ずしも聖職者というわけではなく、物見遊山の巡礼(作品番号③⑤⑩⑮)や、武士(世俗の人、作品番号⑦⑩⑪⑬⑭)となっている。これは霊山立山をはじめとする「異界」が世俗化して、物見遊山のための恰好の名所として有名になり、宗教者でなくても誰もが比較的容易に「異界」を体験できるようになったために、その時代のニーズに合わせて説話の内容も変化させることで、読者の興味関心を高めようとしたのだろう。

「片袖幽霊譚」以外のジャンルの読み物でもこのような傾向は顕著に見られる。十返舎一九の『方言修行金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」(以下、『金草鞋』とする)の中で、一九は地獄の存在そのものは否定しないが「立山地獄」は本当の地獄ではないと断言している⁽²⁴⁾。⑨『諸国新百物語』でも「…実に此御山(筆者註：ここでは越中しら山のこと、立山の誤りと思われる)にてかかるゆうれいに逢ひける事、ままおほしといひつたへたれば、さもありません、それはまこと是は偽りにてありき…」⁽²⁵⁾と、同様のことを述べている。

また平安時代より立山は「亡き人々の魂が集まる場所」といわれてきた。『今昔物語集』巻十四の八には以下のような一節がある。

「…去来(いざ)、彼の立山に詣で地獄の燃らむを見て、我が母の事をも推し量て、思ひ観ぜむ…」(傍線筆者) 筆者註：思い観ずる…観想する ある特定の事物に心を専注して、迷情(迷いの心)を除こうとすること

『今昔物語集』にもあるように、書生ら遺族は亡者となった妻（母）に会いに行ったわけではなく、妻（母）が堕ちたであろう立山地獄へ行き、そこで在りし日の姿を観想し、思いをはせるのが目的であった。そのためにも「貴き聖人の僧」も同行しているのである。実際に書生一家は亡き妻（母）の姿を見ることはできず、声を聞くだけにとどまっている。つまり会うことはかなわなかったのである。「異界」において亡者と生者が接触する際のイニシアティブを握っているのは、あくまで亡者の側であり、そもそも「異界」に生者が行っても、意図した亡者に会うことはできないのである。これを茶化したのが前述の『金草鞋』で、亡き妻に会うため立山にやってきた男が、妻の霊には会えずに酒屋の亭主の幽霊に会い、飲み代のツケを催促された。しかもお金が足りなかったために酒屋の亭主は極楽へ行くことができなかったというオチつきである。では、「立山に行けば死んだ人に会える」という伝承は、いつごろから言われるようになったのだろうか。この点について説話などの文学作品から推測するに、やはり江戸時代の中頃からといえるだろう。菊岡沾涼著『諸国里人談』巻三所収「山野部 立山」に次の一節がある⁽²⁶⁾。

「…俗ニ云、此山ニシテ願ヘバ思フ人ノ亡霊、影ノコトク見ユルト也…」

また前述の『金草鞋』にも同様の記述がある。

「…此立山へ参詣すると、死んだものにあはれるといふことでござるから…」

さらに上田秋成著『春雨物語』（江戸後期、未完成）所収の「樊噲」においては、父と兄を殺害し盗賊となった樊噲が自分の犯した罪の重さを自覚して、死後に堕ちるであろう「立山地獄」を実際に下見しようと手下とともに立山を訪れたところ、2、3人の餓鬼が現れて「立山禅定のかひあり…」と満足したという逸話もある。

これらの記述から、18世紀中ごろになって「立山へ行く^{のやずいひつ}と死んだ人に会うことができる」という俗説が生まれていたことが分かる。さらに大石千引著『野乃舎随筆』⁽²⁷⁾所収の説話「偽幽霊」は、その俗説を題材に創作された新しい説話である。妻を亡くした版木彫松五郎が「…越中国立山といふ処にゆけば、失せたる人にもあふといふなり…」と立山の麓の家に泊まるが、そこで会った妻の幽霊は松五郎が泊まった家の下女が成りすましていたという話である。他人の女が幽霊に成りすましていたという話は『耳囊』所収「幽霊奉公の事」⁽²⁸⁾にもみられるし、江戸末期につくられた『狂歌百物語』⁽²⁹⁾では、立山で生業としての幽霊のなりすましは恰好の題材としていくつもの狂歌が詠まれている。さらに明治になってからも『大岡政談於半長右衛門実記』⁽³⁰⁾が上梓されている。前述の「似幽霊」の説話と江戸時代に人気を博した大岡政談をミックスした娯楽的読み物である。江戸の小八が、立山で妻の幽霊に成りすましていた下女を見初めて江戸へ連れ帰ったところ、立山の主人が女を連れ戻しに来てひと騒動起きる。最後は大岡越前守の名裁きでめでたく小八と下女は夫婦になるという筋書きである。さらにこの作品を元に田中貢太郎が短編小説『立山の亡者宿』を描く⁽³¹⁾など、「似幽霊」に端を発する作品の系譜ができあがっていった。

そして、「表-8 亡者が手渡した（置いていった）もの」をご覧いただきたい。当然ながら「片袖」が最も多いのだが、中には「片袖」に加えもう一品（「つつみ紙（曼陀羅）」「血で書いた歌一首」「香盒^{こうばこ}」など）や「片袖」ではなく別のもの（「手拭」「脇指」「髪一束・歌一首」といったものもある。「片袖幽霊譚」も内容が多岐にわたると、手渡すものも様々に変化している。時代やストーリーに合わせて細部にいたるまで様々な工夫を凝らし、読者を飽きさせない仕掛けをしているのが、江戸時代の説話の特徴といえるだろう。

2-c 『善知安方忠義伝』について

『善知安方忠義伝』前編は、文化3年（1807）に山東京伝によって著され、江戸通油町鶴屋喜右衛門によって出版された読本である⁽³²⁾。附言に「…扱此草紙は良門のゆゑよしを大路とし、善知と云謡曲の趣を径とし、事を狂言綺語にまうけつくりたる物語なれば、^{ことごとく}尽そら言にて、歌舞伎の狂言に等しく、児女の徒然を慰るのみなり…」とあり、元は女性や子供のための読本として書いたと述べている。

この読本には他には見られない大きな特徴がある。それはこの本の題名にも登場する「善知安方」という

人物は、主人公かと思いきや物語早々に亡くなってしまい、その後は幽霊としてしか登場しない。そして立山地獄や越後の親不知などに現れ、謀反を起こそうとする平良門を諷めるのである。本多朱里氏はこのような善知安方を評して「…個々の事件をつなげ、それを読者に見せる人物、物語の語り手に近い立場にいる人物…」と述べるとともに⁽³³⁾、善知安方にはストーリー上で「狂言回し」の役割を与えられていると結論付けている。確かに善知安方の登場は、読者に一連の事件や出来事の連続性、登場人物間の関係性を示す、そして、物語全般に一種の緊張感を与える重要な要素となっている。それと同時に読者に大きなインパクトを与えるのは、善知安方が主君の平良門に謀反をやめるよう諷めたために誅殺されたにもかかわらず諷言をやめず、失敗しても何度も繰り返すという、その忠義心であろう。越中立山地獄谷で善知安方の幽霊に出会った義兄の鷺沼太郎は、殺生の罪で地獄の責めを受けて苦しむ善知安方の様子を知り次のように述べ、菩提を弔っている。

「…殊更彼（筆者註、善知安方）は世にたぐひなき忠臣なれば、殺生の罪ありて、^{ひとたび}一度苦を受くるとも、いかでか仏の哀れみなからんや」（傍線筆者）⁽³⁴⁾

さて、ここにおいて疑問に思われるのは、仏教の教義において主君に対する忠義は、墮地獄から抜け出し往生できる理由となりうるかということである。仏教では、死後に地獄に墮ちることなく浄土の世界に行けるように、生前にできうる限りの善行を積むことを説いている。これが日常生活を送るうえで必要なこととされてきた。仏教説話においても、この因果応報は教訓として強く唱えられ説話のストーリーの根幹をなすものが多い。主君に対し忠義を尽くすという行為そのものは、封建社会に生きる武士にとっては重要なことであり、幕藩体制をはじめ、江戸時代の社会を維持していくうえで必要な考え方である。しかしそれに加えて忠義を実践することが仏の救いが得られる善行の一つとなるということは、従来の説話にもなかった。とすれば、このような鷺沼太郎の発言は、仏教倫理と融合し成立していった江戸時代独特の社会規範・社会通念とすべきであり、その後の日本人の倫理思想形成にも大きな影響を与えたといえるだろう。

おわりに

本稿は、先学の「片袖幽霊譚」研究に際して依拠してきた多くの文学作品を活用しながら、成立年代や舞台となった場所、亡者が手渡したものなどに着目して、より子細に分析を試みその変容について検証したものである。その結果、仏教的な内容の説話が時代相や作者の制作意図などを通して再編成されていったことで、当時に生活した人々の社会通念や興味関心を色濃く反映した、世俗的な内容の説話に変容していったことが明らかになったと思う。

人々は日ごろから仏教を信仰し、時折、様々な「カタチ」で宗教活動に参加しながらも、その目は「あの世」の世界に向けられていたわけではなく、むしろ自分たちの生きている「この世」の世界でいかに生きていくか、いかに自分の生き方を見直すかという面に向けられていた。仏教の教義が庶民に定着したことで、社会的にも個人的にも仏教の倫理的な拘束力が高まり、生活全般を厳格に統制するようになっていった。そのような中で登場したのが「片袖幽霊譚」から変容した、いわゆる「弁惑物」である。井原西鶴の『本朝桜陰比事』（元禄2年（1689））、俳林子の『新諸国百物語』（元禄5年（1692））⁽³⁵⁾、桃溪山人の『怪談辨妄録』（寛政12年（1800））⁽³⁶⁾などが代表作品である。このうち『怪談辨妄録』は、商家の元奉公人が主家の葬儀の際に死者の着物の片袖を盗み、後日、僧に扮して立山で死者に会い片袖を託されたと言って主に近づく。そして主から供養のためにと金品をせしめるが、不審に思った丁稚が僧を尾行し悪事が露見するというものである。

この説話は、以下の3つの要素を前提として成立している。

- ① 作者は「片袖幽霊譚」に懐疑的な考えを持っている。
- ② 悪事は必ず露見すると確信している

③検証する（作品中では尾行する）事で、真相が判明する

つまり「何でも疑ってみる」「自分の目で確かめてみる」そして、江戸時代の読本のコンセプトでもある「勧善懲悪」の要素が含まれているのである。その意味でこれらの説話は、江戸時代の人々に芽生えつつあった、近代的できわめて啓蒙的な考え方に基づいて描かれているといえるだろう。この時代は仏教に基づく社会的・倫理的拘束力と、現実起きる事象との多くのギャップについて、検証しようとする意識が生まれた時期でもあったのである。

「…世の奇怪と称するもの多くはこの如きこと多しけれ…」(『怪談辨妄録』)

まさにこのような「弁惑物」は、江戸庶民の思いを代弁する作品であり、ある意味、「弁惑物」は庶民にとって「カタルシス」のような作品であったともいえるのではなかろうか。

以上、各作品の分析がまだまだ不十分であり、ご批判を受ける点多々あるのは承知である。今後も研究を進めていく予定ではあるが、ぜひ皆様のご教示を賜りたいということで筆をおく次第である。

[註]

- (1) 平成24年度特別企画展『文学にみる立山』展示解説書(富山県[立山博物館]、2012年)を参照のこと。
- (2) 註1、前掲書26頁
- (3) 註1、前掲書28頁
- (4) 拙稿「【研究余録】立山に関する文学作品から見る時代相・思想の変容について」(『研究紀要』第29号所収、富山県[立山博物館]、2023年)
- (5) 註1、前掲書7頁
- (6) 太刀川清「怪談の弁惑物—亡者片袖説話の場合—」(『学海』16号所収、上田女子短期大学国語国文学会、2000年)
- (7) 堤邦彦『江戸の怪異譚—地下水脈の系譜』(ペリかん社、2004年)、
- (8) 三村昌義「片袖幽霊譚の変容—謡曲「善知鳥」から上方落語「片袖」まで—」(『芸能の科学』第18号所収、1990年)
- (9) 『法華験記』第二百四話を、漢字仮名交じり文にしたものが『今昔物語集』巻十四の七である。
- (10) 註4、前掲書6頁。出典元は、池田弥三郎「幽霊の条件」(1974年、小松和彦編『怪異の民俗学⑥幽霊』所収、河出書房新社、2001年)
- (11) 若尾政希氏は、令和5年11月に越中央壇会が主催した講演会で「書物・出版はいかに社会・人を変えてきたのか」という演題で講師を担当され、その際に講演の内容をレジュメにして配布された。当該部分はそのレジュメからの引用である。
- (12) 『法華験記』『今昔物語集』をはじめ、『平家物語』巻五「文覚荒行」や、大験者次郎が修行した山として立山をあげている『新猿楽記』など、多くの書籍によって証明される。
- (13) 平成28年度特別企画展『立山×地獄展』展示解説書(富山県[立山博物館]、2016年)21頁、『館報 第1号』(鯖江市まなべの館、鯖江市教育委員会、2017年)などに詳しい。
- (14) 『新撰歌枕名寄』下(黒田彰子編、古典文庫、平成元年(1989))
- (15) 註1、前掲書26頁以降に翻刻を掲載しているので、参照のこと。
- (16) 「心中」に関する研究については、森田健司大阪学院大学経済学部教授が優れた論考を出している。
- (17) 加藤基樹「近世文芸とその時代—人々の生き方と立山の語られ方と—」(平成24年度特別企画展『文学にみる立山』展示解説書(富山県[立山博物館]、2012年)所収)
- (18) 井原西鶴『諸艶大鑑』巻八「流れは何の因果経 一、心中死の面影目前あふ事」(貞享元年(1684)、京都府立京都学・歴史館蔵)に以下の記述がある。

「(筆者註、心中をする男女は)…其ためしには、残らずはし女郎の仕業なり。男も名代の者は、たとへ恋はすがるとても、せぬ事ぞかし。雲井は太夫職にして、かゝるあさましき最後、今に不思議なり。兎角やすものは銭失いと申せし」
- (19) 『新潮日本古典集成<新装版>日本霊異記』(小泉道校注、平成30年(2018)、新潮社)
- (20) 鈴木正三作、義雲、雲歩著『因果物語』片仮名本(寛文元年(1661)、当館蔵)
- (21) 本稿では、国書データベース所収のマイクロフィルム画像、『驢鞍橋』(成城大学民俗学研究所蔵)を使用した。
- (22) 註19、前掲書54頁註一を参照のこと。『日本霊異記』上巻第十や、同書中巻第十五の説話にこの事例がみられる。

- (23) 『今昔物語集』 卷十四の八に次の一節がある。
「…貴き聖人の僧を具したり。(中略) 地獄の焰宜く見ゆ。如此く地獄十許^{ぼかり}を廻てみるに、中に極て勝て難堪気なる地獄に至て前の如く経を講じ、錫杖振るなど為る程は、焰し少し宜く成る程に見ゆ。…」
- (24) 十返舎一九『金草鞋』(文政11年(1828)、個人蔵)、翻刻については、註1、平成24年度特別企画展『文学にみる立山』展示解説書(富山県[立山博物館]、2012年)を参照のこと
- (25) 卷四「嘘の皮かぶる姿の僧 付り越中白山のさた」(『続百物語怪談集成』所収、太刀川清校訂、国書刊行会、1993年)
- (26) 註1、前掲書45頁に翻刻を掲載している。
- (27) 註1、前掲書47頁に翻刻を掲載している。
- (28) 東洋文庫207『耳袋』(根岸鎮衛、平凡社、昭和47年(1972))
- (29) 拙稿『『狂歌百物語』にみる江戸時代後期の立山観』(『研究紀要』第18号所収、富山県[立山博物館]、2011年)
- (30) 「幽霊小八の事並越中立山亡者宿の事」(『大岡政談於半長右衛門実記』所収、編集人不詳、日吉堂、明治20年(1887)、国立国会図書館蔵)。これは「似幽霊」の系譜をひく作品である。
- (31) 田中貢太郎『日本怪談大全 第五卷 奇談の館』(国書刊行会、1995年)
- (32) 十返舎一九『善知安方忠義伝』(関西大学図書館蔵)。奥書に「文化三年丙寅冬十二月発兌 書林 江戸通油町 鶴屋喜右衛門繡梓」とあり、文化3年(1807)に出版されたことがわかる。
- (33) 本多朱里『『善知安方忠義伝』攷一京伝読本の手法一』(『読本研究新集 第二集』所収、翰林書房、2000年)
- (34) 註32、前掲書より
- (35) 『続百物語怪談集成』(太刀川清校訂、国書刊行会、1993年)
- (36) 東洋大学哲学堂文庫蔵。本稿では、同文庫所蔵の『怪談辨妄録』マイクロフィルム版を翻刻し、それを引用した。

表-1 片袖幽霊譚を題材とする説話の変遷

No.	作品名	作者	成立年 (表-2)	舞台(表-3)	亡者(表-4)	墮地獄の有無と その理由(表-5)
①	善知鳥	未詳	室町時代	越中立山 陸奥外ヶ浜	獵師	地獄に墮ちた 殺生の罪
②	清涼寺縁起絵詞 巻六	青蓮院尊応	永正12(1515) (縁起成立年)	越中立山、姥堂(ママ)、 山城葛野郡嵯峨庄小淵郷	道善	施を過分に受けた 餓鬼道に墮ちた
③	因果物語 (片仮名本)	鈴木正三作 義雲・雲歩編	寛文元(1661)	摂州富田町 箱根山	喜右衛門	地獄に墮ちた 「…飢渴寒熱ノ苦患限ナシ…」
④	宿直草	五条橋通扇屋町丁子 屋西村九郎右衛門	延宝6(1678)	寛永14(1637) 関東某寺院 建仁寺門前の餅屋	餅屋の娘 娘は死んでいない	父母が過分に喝食から 餅代の油をとったため 攻めを受けるが、地獄 へ墮ちてはいない(娘 は生きていたため)
⑤	新御伽婢子 (御伽大黒の槌)	未達	天和3(1683) 享保12(1727)	泉州堺、平野 箱根	和泉堺松や の何某の娘	墮地獄の寸前で脱した 心中(邪淫の悪執)
⑥	百物語評判 (古今百物語評判)	山岡元隣	貞享3(1686)			
⑦	奇異雑談集 巻第一 (内題:和漢奇異雑談集)	中村某 (僧力)	貞享4(1687) 年版の後補版 か?	応仁の乱 京都五条 越中(立山は物語の 舞台になっていない)	五条の足軽	墮地獄の記述なし
⑧	本朝桜陰比事 巻二之八	井原西鶴	元禄2(1689)	都 越中立山(実際は行っ てない)	金銭貸借の諍いで 殺害された、都の 欲深い金貸し	墮地獄の記述なし 高利貸で暴利を貪った ため、墮地獄は当然と いう意識もあるか *辨惑物
⑨	諸国新百物語	俳林子	元禄5(1692)	伊勢松坂 越中しら山(ママ)(実 際は行ってない)	伊勢松坂の豪商の 娘、千世	生前の罪、「罪障の山霧 深く…」*辨惑物 墮地獄の記述なし
⑩	諸国因果物語 三四編	白梅園鷺水 (青木鷺水)	宝永4(1707)	京都六条 越中立山	市之介(子)	墮地獄の記述なし
⑪	善悪因果集	蓮盛	宝永8(1711)	越中立山	金沢某所皮屋何某 が妻	亡者が墮地獄を訴えた
⑫	怪談弁妄録	桃溪山人	寛政12(1800)	京師三條街 羽黒山	鍋釜商の妻	深い罪業 *辨惑物
⑬	善知安方忠義伝 前編	山東京伝	文化4(1808)	外ヶ浜 越中立山 筑波山 下総など	善知安方	殺生の罪科 餓鬼道へ墮ちたが、地 獄の責めを受けている
⑭	大念佛寺霊宝略伝 連理隻袖	十返舎一九作 狂画堂蘆國画	文政7(1807)	摂州福原 箱根山ほか	腰元の浅香	地獄に墮ちた 深い罪障
⑮	隻袖事略	記載なし	慶応2(1866) 天保10(1839) 天明7(1787)	大坂平野 箱根	津国住吉、山上松 太夫の妻	生前の罪
⑯	鏡ヶ池操松影 (江島屋騒動)	三遊亭圓朝	明治2(1868)	江戸芝日陰町江島屋 下総大貫村 藤ヶ谷新田	医師倉岡元庵の娘 お里	墮地獄の記述なし
⑰	講談幽霊の片袖	石川一ロ 講演 丸山平次郎 速記	明治42(1909)	摂州福原 箱根の原ほか	腰元の浅香	墮地獄の記述なし
⑱	耳袋(囊)	根岸鎮衛	江戸後期	奥州或諸侯の藩中 江戸	武士の妻	墮地獄の記述なし
⑲	三ツの山巡 (内題:三の山廻)	尾張藩士某	文政6(1823)	芦峯寺 越中立山	三州某の娘	墮地獄の記述なし

亡者の遺族 (表-6)	亡者の伝言 (表-7)	亡者と遺族の仲介者 (表-8)	亡者が手渡したもの (表-9)
外ヶ浜の妻子	蓑笠を手向け供養すること	諸国一見の僧	片袖
妻子(小淵郷の名主の一家)	大佛供を備え法華八講を執行う	越中立山に参詣の僧	片袖
一門	自分の遺産を使って供養して欲しい	近村ノ者	着物の左の片袖
餅屋の娘の父母	都へ上り、父母に対し油を過分にとることをやめるよう伝えてほしい	関東から初めて京に上った六十あまりの旅僧	小袖の片袖
和泉堺松や何某とその妻	懇ろに弔ってほしい	西国めぐりのため上方へのぼる巡礼二人	手拭
			死人に着せたる着物の袖つま
内方(妻)	「…われわれに御あい候よしをわたくしの宿におほせ候へ…」	となりの亭主	十徳の袖(5.6尺くらいの木に袖をおしあて切ってわたす)
金貸しの妻子	弔いをする事 金銀を施すこと	三十ばかりの旅僧	わきざし 脇指
娘の父母	自分を弔って欲しい	つた：罷免された娘の腰元諸国修行の僧(つたの夫)	「懐より白き着物のぬひあるかた袖とりだし…」
木綿商市左衛門と妻	物を父母に手渡すこと	富士先達の同行なりける人	つつみ紙(曼陀羅)袷の片袖
金沢某所皮屋何某	自分の墮地獄を伝え、追善供養を営むこと	賀州のある武士	小袖の片袖
京師三條街の鍋釜商	月牌の資を高野山へ寄進する 自分の冥福を祈ってほしい	やまふし 道士	こそで 綵帛一塊
錦木(故人) 千代童(子)	外ヶ浜へ行き、諫死の理由を妻子に伝えてほしい。香花一遍の念仏を手向けてほしい	鷲沼太郎光友(錦木の兄)	木曾の麻衣の片袖 血で書いた歌一首
檜蔭多門 住吉社人、山上松太夫(浅香の父)	平野大念佛寺天得如来の御前にて融通念仏の御回向に與りたき…	亀井太郎(福原家の侍臣)	紫朽葉色の小袖の片袖 香盒の実(身)の部分
山上松太夫	大念佛寺の回向を行う	西国巡礼の奥州の土民	紫朽葉色の片袖、 香盒
お里の母	なし 片袖を遺しての投身は、この世に対する遺恨を表すため、または自ら成仏しないように仕向けたとも考えられる	なし	お里が身投げした利根川の傍らに花嫁衣装の片袖が引っかかっていた(手渡してない)
檜蔭多門 住吉社人、山上松太夫(浅香の父)	若君の保護をしながら、津の国へっ向かって欲しい	亀井太郎(福原家の侍臣)	小袖の片袖
勤番で江戸詰の武士	自分の遺体を見つけてほしい	なし	髪一束 歌 (置いていった)
三州某	鐘を奉納してほしい 「鐘を上げくれ候…」	立山へ詣でた六部	女の髪と着物の袖(手渡したか不明)

No.	作品名	結 果
①	善知鳥	妻子が蓑笠を手向けるが、それが仇となり亡者から子が見えなくなる。地獄で獵師の亡者は、鷹と化した善知鳥に襲われる責めを受ける。
②	清凉寺縁起絵詞 巻六	小淵の住人が善光寺から立山参詣をした際、道善が現れ弔いにより餓鬼道を脱したことを伝えた。10月15日に弔いの儀式を行う。
③	因果物語 (片仮名本)	近村の者が喜右衛門の遺族に片袖を見せ子細を話したところ、遺族は驚いて導師に供養してもらった。
④	宿直草	巻二第九「建仁寺の餅屋告をうる事」 あらずじ：旅僧が建仁寺門前の餅屋に宿を借りた。そこの娘は見目麗しいが、夜になると「ひいひい」と叫び声を上げ苦しみ、それは5年も続き医者や様々な神仏に頼るが一向に効果がない。僧が父母に語るには、ある日旅僧が道を歩いているとわかに日が暮れて突然、建仁寺によく似た寺が眼前に現れ、境内では鬼達が若い女を2枚の板に挟んで押しつぶし生き血を搾り取っていた。血を搾り取られた娘は旅僧に近づき、喝食が父母の営む餅屋で餅を買う時に、お代の油を過分にとったため、父母の代わりに自分が犠牲となって、生きながら不足分の血を鬼にとられていること、そしてこのことを父母に伝えて欲しいことを訴え、証拠として小袖のたもとをといて旅僧に渡した。旅僧が餅屋に行き子細を語ると父母は驚き、僧の持参した片袖は着物にぴったり一致し、父母は正月に娘に着せたものであると語った。父母は娘の病の原因は自分達の罪（餅代として喝食から過分に油をとったこと）が原因であった事を知り悲しんだ。
⑤	新御伽婢子 (御伽大黒の槌)	平野大念佛寺にて大念仏を執り行ったところ、一七日目の朝に娘の霊が仏前に現れ、地獄に墮ちる寸前で脱し得たことを謝し、沈香合を如来に捧げた。
⑥	百物語評判 (古今百物語評判)	巻之二「管根の地獄并富士の三尊来迎の事」 「或はしたしき親なれたる妻などの死しても毎かなしき折から、出家などのわたりてそこへを通りしに、其死人よりかたみをおくり給ひしなどいひて、死人着せやりたる着物の袖つまなど持ち来る事多し。是れ皆手だてある事のやうに覚え侍る」、「いかでか人死し、かたちつゝぬえて後、更にくるしみをうくる事あらんや。しからば我朝にいふ所の箱根山、越中のしら山、たて山、皆疏黄のせいよりさまへわき出るを申しならはしたるにて侍るべし」
⑦	奇異雑談集 巻第一 (内題：和漢奇異雑談集)	となりの亭主があづかってきた十徳の片袖は、妻が保管していた形見の十徳とぴったりと一致した。また形見のかたびらも隣の亭主が足軽と越中で会った時に足軽が着ていたものと同じであった。また囲炉裏の縁に刀傷があり、もよりの糸のほつれが2つ3つ挟まっていた。これはとなりの亭主が越中の道ばたで足軽から片袖を渡された時に、袖を切り取るのに使った木の切り口に糸のほつれがついていたのと状況が酷似していた。後に同じ村の人が越中へ行き、その木を探したが全く見つからなかった。
⑧	本朝桜陰比事 巻二之八	巻二之八「死人ハ目前の劔山扱もはや桶を取出し刃物ハふり袖に包む事」 訪ねてきた僧侶を不審に思った町衆が、子細を御前（町奉行）に伝えたところ、「金貸しの家に住えた下男下女で、近頃暇をとらせた者はいないか調べよ」との指示を受けた。そして六尺と腰元使いの女が怪しいと、渋谷にある女の家を調べたら、その男女が一緒にいたため、捕まえて詮議した。女は早桶から脇差を盗み、男と共に遺族から金銀を奪う計画を立てたことが分かり、処罰を受けた。
⑨	諸国新百物語	父母が娘の追善を僧に依頼し、多数の黄金を僧に与えた。しかし手代が不審に思って僧の後をつけたところ、そこは店を解雇された腰元つたとその夫の住まいであった。二人は貧しさゆえにこのような謀をなしたのであった。悪事はすべて露見し、二人は糾弾された。
⑩	諸国因果物語 三四編	父母が、市之介の病氣平癒を願い浄土宗から日蓮宗に改宗したが、亡者となった市之介が曼荼羅を言付けたことで、浄土宗の法式で弔った。
⑪	善悪因果集	武士が持参した片袖は長櫃にあった着物と一致した。夫は感嘆して、懇ろに追善供養を行った。
⑫	怪談弁妄録	道士の言動を不審に思った小厮（でっち）が後をつけたところ、釜屋に勤めていた下女に会った。片袖は妻が病気で伏していたときにこの女が盗んだものであった。小厮の機転で悪事が露見することとなった。
⑬	善知安方忠義伝 前編	善知安方は殺生の罪科で畜生道に墮ちた。しかし焦熱地獄や鳥地獄など、様々な地獄の責め苦を受け苦しんだ。鷲沼太郎光友は室堂に一晩とどまり念仏を唱え、安方の菩提を弔った。
⑭	大念佛寺靈宝略伝 連理隻袖	栖蔭多門は目の前に現れた浅香の幽霊に、主君である福原家の再興を約束し、殺された浅香の敵を討ったこと、霊鉦を手に入れたことを伝えた。すると浅香は、地獄の苦を早くまぬがれ浄土に生まれることを待つのみと喜んだ。
⑮	隻袖事略	三十六世道如上人に融通念佛の法事を執行してもらおう。端嚴な女人たちが上人の前に現れ、山上松太夫の妻は上人の大慈力により往生極楽を遂げたと告げた。
⑯	鏡ヶ池操松影 (江島屋騒動)	あらずじ：江戸芝日陰町の古着屋、江島屋でイカモノの花嫁衣装を買わされたお里は、雨で濡れた衣装が婚礼の際に破れてしまったことで嫁ぎ先の主人の不興を買って、花嫁衣装の片袖を木に掛け神崎の土手から利根川へ身を投げた。その後、江島屋では女房が急死するなど次々と奇怪な事が起きた。お里の3回忌に当たる年のある夜、江島屋では主の治右衛門と番頭の金兵衛が2人で蔵へ入った。少し入ったところでふとろうそくが消えた。何度も火をつけなおすがすぐに消えてしまう。不思議に思ってふと上を見ると、片袖のない着物を着てぐっしり濡れた女の幽霊がいた。驚いて部屋に戻った金兵衛は、前年12月に藤ヶ谷新田で老婆に出会ったことを思い出して治右衛門に話した。老婆は花嫁衣装の友禅を少しずつ囲炉裏の火にくべ、その灰に火箸で「目」と書き、つついていたのだった。金兵衛が老婆のまねをすると治右衛門は急に眼を押さえて苦しみだした…。その老婆こそ今も恨みを忘れないお里の母なのだった。やがて江島屋は落ちぶれて客も奉公人も寄りつかなくなり、とうとう火事を出して潰れてしまった。無一文になった治右衛門はもはや江戸にいらなくなり、下総まで流れて来たのがお里の7回忌の日。利根川の土手を歩いているときに折からの雨で足をすべらせ、川に落ちて流されてしまった。
⑰	講談幽霊の片袖	十返舎一九「大念佛寺靈宝略伝 連理隻袖」を講談に改編。口述した内容を筆録
⑱	耳袋(囊)	夫の留守中に行方知れずとされた妻は、実は義母の不義を目撃したため殺され、その遺体は谷に捨てられたのだった。妻の幽霊の訴えによって遺体は見つかり、義母の悪事は露見したことで義母は行方をくらました。
⑲	三つの山巡 (内題：三の山廻)	六部から娘の訴えを聞いた親は、鐘を鑄て奉納した。鐘の右側には女の髪と着物の袖がつけられていた。芦峯寺の案内人（教覚坊カ）立山の道中で筆者に語った。芦峯寺へ行くときの鐘が実在したが、筆者が銘を読むと全く異なる内容であった。 「…途中山師などの業にて賽銭を取んがための事か…」

備 考
<p>版本 カケリ等の朱書多数。殺生を重ねる身を嘆き救いを求める。能楽「善知鳥」の上演記録の初出は、寛正6年(1468)である。 「…助けて賜べや御僧…」</p>
<p>卷六第二十段「立山参詣僧の説話」、卷六のみ詞書きのみで、絵がない。 道善は山城国葛野郡小淵郷の名主。餓鬼道に堕ちた。立山と善光寺の関係。婆堂の記述あり</p>
<p>卷上「亡者人二便テ吊ヲ頼事付夢中ニ吊ヲ頼事」、 卷中「殺生ノ報ノ事」：「越中立山ノ入口ニ祖母堂ト云フアリ。三途川ノ姥ヲ六十六体造置タリ。殺生禁制ノ地也…」</p>
<p>卷五の三「沈香合」「…我、邪淫の悪執にひかれ地獄に入りなんとせしを御申の力に得脱しぬ」 「御伽大黒の槌」は大府立中之島図書館蔵</p>
<p>卷第一の一「五条の足軽京にて死するに越中にて人これにあふ事」 「…となりの亭主、善光寺さんけいより下向して宿につく。…」・「…およそ越中にて死たる人にあふ事、むかしよりこれあり。みな善光寺さんけいのひとあるひは修行真実の人は死にたる人にあふなり」・「かるがゆへに越中は地獄道なり」 「立山のふもとおみて老婆堂を作り、木造の老婆、むかし天より下といひつたへたり。是、三途河の老婆なり」 立山と善光寺との関係がみられる。芦峯寺のうば堂に関する記述がみられる。</p>
<p>「御伽比丘尼」の改題本 卷之四「嘘の皮かぶる姿の僧付り越中白山のさた」、「実に此御山にてかゝるゆうれいに逢ひける事、まゝおほしといひつたへたれば、さもありなん、それはまこと是れは偽りにてありき…」 しら山（立山の事か）で幽霊に会えるという伝承そのものは否定していない。</p>
<p>卷の四「死したる子立山より言傳せし事」 三禅定の習俗らしきものがみられる</p>
<p>「一奸猾欺豪商（いつのまいすおおあきんとをあさむく）」 桃溪山人（丹羽桃溪）は大坂の浮世絵師</p>
<p>「…殊更、彼は世にたぐひなき忠臣なれば、殺生の罪ありて一度苦をうくるとも、いかでか仏の憐みなからんや…」</p>
<p>大念佛寺の秘宝である紫朽葉色の片袖、香盒、亀鉦にまつわる物語。 卷之四「宮根山隻袖之来由」 浅香が地獄へ堕ちた時の責め苦の描写：「夜叉羅刹の杖にうたれ、牛頭馬頭の責をうくるに、ひまなし。當山権現の御方便にて須臾の暇を伺ひ…」（『今昔物語集』のオマージュ）</p>
<p>天保10年（1839）の臥丸なる人物の書き込みあり。大念佛寺に伝わる片袖と香合について書写し、くわしく述べている。</p>
<p>卷の八「亡霊の歌の事」 亡者が直接夫の夢枕に立ち、夫に髪一束と歌を渡している。</p>

表-2 成立時期

世紀	作品番号	作品点数
15世紀	① 室町時代	1
16世紀	② 永正12年(1515)	1
17世紀	③ 寛文元年(1661) ④ 延宝6年(1678) ⑤ 天和3年(1683) ⑥ 貞享3年(1686) ⑦ 貞享4年(1687) ⑧ 元禄2年(1689) ⑨ 元禄5年(1692)	7
18世紀	⑩ 宝永4年(1707) ⑪ 宝永8年(1711) ⑫ 寛政12年(1800)	3
19世紀	⑬ 文化4年(1808) ⑭ 文政7年(1807) ⑮ 天明7年(1787) ⑯ 明治2年(1868) ⑰ 江戸時代後期 ⑱ 文政6年(1823)	6
20世紀	⑲ 明治42年(1909)	1

表-3 舞台となった場所

	亡者と遺族の仲介者が会った場所 (亡者が言付をした場所)	遺族の住む場所
①	越中立山	陸奥外ヶ浜
②	越中立山	山城葛野郡嵯峨庄小湊郷
③	箱根山	摂州富田町
④	関東某寺院	建仁寺門前の餅屋
⑤	箱根	泉州堺 平野大念佛寺
⑥	—	—
⑦	越中(立山は出てこない)	京都五条
⑧	越中立山(実際は行っていない)	都
⑨	越中しら山(実際は行っていない)	伊勢松坂
⑩	越中立山	京都六条
⑪	越中立山	金沢
⑫	羽黒山	京都三條
⑬	越中立山	外ヶ浜
⑭	箱根山	摂州福原
⑮	箱根	大坂平野
⑯	—	藤ヶ谷新田
⑰	箱根山	摂州福原
⑱	江戸	奥州或諸侯の藩中
⑲	越中	三州
	越中立山6 越中しら山1 越中2 箱根(山)5 羽黒山1 関東某寺院1 江戸1	外ヶ浜2 山城小湊郷1 富田町1 建仁寺門前の餅屋1 泉州堺1 平野2 京都3 福原2 伊勢松坂1 金沢1 奥州或諸侯の藩中1 三州1

表-4 亡者

	亡者	性別
①	獵師	男
②	名主道善	男
③	喜右衛門	男
④	建仁寺門前の餅屋の娘	女
⑤	泉州堺松や某の娘	女
⑥	—	—
⑦	五条の足輕	男
⑧	欲の深い高利貸し	男
⑨	伊勢松坂の豪商の娘 千世	女
⑩	市之助	男
⑪	金沢某所皮屋何某が妻	女
⑫	鍋鎌商の妻	女
⑬	善知安方	男
⑭	腰元の浅香	女
⑮	津国住吉 山上松太夫の妻	女
⑯	医師倉岡元庵の娘 お里	女
⑰	腰元の浅香	女
⑱	武士の妻	女
⑲	三州某の娘	女
	男 7	女 11

参考 番号と作品との対応表

番号	作品名
①	善知鳥
②	清涼寺縁起絵詞
③	因果物語(片仮名本)
④	宿直草
⑤	新御伽婢子(御伽大黒の槌)
⑥	古今百物語評判
⑦	奇異雑談集
⑧	本朝桜陰比事
⑨	諸国新百物語
⑩	諸国因果物語
⑪	善悪因果集
⑫	怪談弁妄録
⑬	善知安方忠義伝 前編
⑭	大念佛寺靈宝略伝 連理隻袖
⑮	隻袖事略
⑯	鏡ヶ池操松影(江島屋騒動)
⑰	講談幽霊の片袖
⑱	耳袋(囊)
⑲	三ツの山巡

表-5 墮地獄の有無とその理由

	墮地獄の有無	具体的な墮地獄の理由
* 墮地獄の理由が明白な罪業である作品		
①「善知鳥」	有(鳥地獄などの責め)	殺生の罪
⑬「善知安方忠義伝」	畜生道に墮ちたが、鳥地獄、焦熱地獄の責めを受けている	主家滅亡後、獵師を生業とし殺生を繰り返した
②「清涼寺縁起」	餓鬼道に墮ちた	(名主として)施しを過分に受けたこと 釈尊に帰依しなかったこと
⑤「新御伽婢子」	墮地獄の寸前で脱した	心中(邪淫の悪執)
④「宿直草」	無(地獄へは墮ちていない)	(娘は死んでいないため)
* 墮地獄の理由が「生前の罪」である作品		
⑨「諸国新百物語」	不明	生前の罪 * 辨惑物なので、架空の話
⑫「怪談辨妄録」	不明	深い罪業 * 辨惑物なので、架空の話
⑭「大念佛寺靈宝略伝連理隻袖」	地獄に墮ちた記述あり	生前の罪
⑮「隻袖事略」	明確な記述なし	生前の罪
* 墮地獄はしたが、その理由が不明である作品		
③「因果物語」	地獄の責めの記述あり	不明
⑪「善悪因果集」	亡者が墮地獄を伝えている	不明
* 墮地獄したかすら不明である作品		
⑦「奇異雑談集」	墮地獄の記述なし	—
⑧「本朝桜陰比事」	墮地獄の記述なし	—
⑩「諸国因果物語」	墮地獄の記述なし	—
⑯「鏡ヶ池操松陰」	墮地獄の記述なし	—
⑰「講談幽霊の片袖」	墮地獄の記述なし	—
⑱「耳袋」	墮地獄の記述なし	—
⑲「三ツの山巡」	墮地獄の記述なし	—

表一六 亡者の遺族

作品	身分	内 容
①	獵師	外ヶ浜の妻子
②	名主	小湊郷の妻子
③	不明	一門
④	商人	餅屋の娘の父母
⑤	商人	和泉堺松や何某とその妻
⑥		—
⑦	足輕	内方(妻)
⑧	商人	高利貸しの妻子
⑨	商人	伊勢松やの娘の父母
⑩	商人	木綿商市左衛門と妻
⑪	商人	金沢某所皮屋何某
⑫	商人	京師三條街の鍋鎌商
⑬	武家	錦木(善知安方の妻・故人)、千代童(子)
⑭	武家	檜蔭多門(浅香の許嫁)、住吉社人山上松太夫(父)
⑮	社人	住吉社人山上松太夫
⑯	医師	お里の母、おまつ
⑰	武家	檜蔭多門(浅香の許嫁)、住吉社人山上松太夫(父)
⑱	武家	勤番で江戸詰の武士(夫)
⑲	商人	三州某

表一七 亡者の伝言

*自分を供養して欲しい	
①	蓑笠を手向けて供養して欲しい
②	大佛具を備え法華八講を執行って欲しい
③	自分の遺産を使って供養して欲しい
⑤	懇ろに弔って欲しい
⑧	弔って欲しい 金銀を施して欲しい
⑨	弔って欲しい
⑬	月牌の資を高野山へ寄付して欲しい 自分の冥福を祈って欲しい
⑭	融通念佛の御回向に與(あずか)りたき…
⑮	大念佛寺の回向を行って欲しい
*そのほか	
④	(僧に)都へ上り、父母に油を過分にとることをやめるよう、伝えて欲しい
⑦	自分に会ったことを家の者に伝えて欲しい
⑩	物(曼陀羅)を父母に手渡して欲しい
⑱	若君の保護をしながら、津の国へ向かって欲しい
⑲	芦峯寺の宿坊へ鐘を奉納して欲しい
*伝言なし	
⑥	
⑯	片袖を遺しての投身は、この世に対する遺恨を表すためと考えられる

表一八 亡者と遺族の仲介者

*僧侶	
①	諸国一見の僧
②	越中立山に参詣の僧
④	関東から京へ上った六十あまりの僧
⑧	三十ばかりの旅僧 *僧に扮している
⑨	諸国修行の僧 *僧に扮している
⑫	道士(やまぶし)
*巡礼(宗教者か俗人かは不明)	
③	近村ノ者
⑤	西国めぐりのため、上方へのぼる巡礼二人
⑩	「…富士先達の同行なりける人…」
⑯	西国巡礼の奥州の土民
⑲	立山へ詣でた六部
*武士(俗人)	
⑦	となりの亭主
⑪	加州のある武士
⑬	鷲沼太郎光友(善知安方の妻、錦木の兄)
⑭	亀井太郎(福原家家臣)
⑮	亀井太郎(福原家家臣)
*仲介者なし	
⑯	お里の死後、お里の霊と母は交流なし
⑱	江戸詰の武士と亡者(妻)が直接会話を する

表一九 亡者が手渡した(置いていった)もの

*片袖	
①	基礎の麻衣の袖
②	かたびらの袖
③	着物の左の片袖
④	小袖の片袖
⑦	十徳の袖 5,6尺くに袖を押し当てて切ってわたす *十徳…室町時代の脇縫いの小素襖の通称、 下級武士が着た
⑨	「…懐より白き着物のぬひたるかた袖取り出し…」
⑪	小袖の片袖
⑫	綵帛(こそで)一塊 *綵帛…さいはく。美しい綾のある絹のこと
⑯	お里が身投げした利根川の傍らに、花嫁衣装の片袖が引っかけ かっていた(手渡していない)
⑰	小袖の片袖
*片袖とほかのもの	
⑩	つつみ紙(曼陀羅)・袷(あわせ)の小袖 *袷…裏地がついている着物
⑬	木曾の麻衣の片袖・血で書いた歌一首
⑭	紫朽葉色の小袖の片袖・香盒
⑮	紫朽葉色の小袖の片袖・香盒
⑲	片袖・女の髪
*その他	
⑤	手拭
⑧	脇指
⑱	髪一束・和歌一首